

2015年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 配付されたもの以外の下じき・用紙は使わないこと。
5. 用紙を立てて見ないこと。
6. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、
トイレに行きたくなった場合、気持ちの悪くなった場合は、だまって
手をあげること。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

環境破壊などというところ、なにがA大仰な感じがしないわけでもないのですが、確かに私たち人間は海や山などの自然環境を壊したり、悪くしたりするようになると、開発という名のものと、さんざん行ってきました。

（注）まず日本の海から見えてきますと、日本は小さな島国なのに、人間の生活を便利にするということで、海岸線に沿って道路をつくったり、橋をつくったり、港をつくったりしてきました。

日本は工業化が進むにつれて、海がどんどん埋め立てられて、海岸線が人工化されたものへと変わっていったのです。環境破壊をあえてやったわけではないのですが、国民の生活を豊かにしようということで開発がどんどん進められ、その結果として、私たちの予想をはるかに超える自然環境の破壊へと至ったと思います。

いま考えてみると、もともと海のことを考えてあげればよかったのではないかと、①埋め立てが進みました。たとえば、東京湾などはほとんど自然の海岸線がないのではないかと考えるほどで、その大部分が埋め立てによる人工物になってしまっています。

干潟や浅瀬などの砂浜地帯はみんな役に立たないという考えだったのでしよう。それで干潟を見れば、こんなところはすぐ埋め立てて、経済発展に役に立つ工場を建てたり、飛行場をつくったりしたほうがよいということになり、そういう方向にどんどん進んでいったものと思われまます。

こうした埋め立ては、東京湾をはじめ名古屋の伊勢湾、大阪湾、福岡の博多湾など、最初は大都市だけでしたが、やがてそれが大都市近県にも及び、さらにその後、地方都市へもどんどん進んでいったのです。こうして、全国各地の海も次々と埋め立てられて人工物をつくることになり、結局、自然の海が非常に少なくなってきたというのが、日本の海の現状といえます。港についても同様です。こんなことをいうと漁師さんは怒るかもしれませんが、漁業的に見て、こんなところにも港をつくる必要があったのか、というような場所にまで港をつくりました。漁業の人が数名程度しかいないようなところにも港をつくってきたのです。

港をつくるというのは、漁師さんの船を守るということもあるのですが、一方で、それは潮の流れを変えてしまうことにもなります。漁港をつくったために、その近辺の海の環境が変わってしまったたり、悪化してしまったりするわけです。そのため当然、魚介類がとれなくなってきたということが実際に起きています。私は北海道から沖縄までずっとそういうところを見させてもらっているのですが、本当にそれを強く感じます。

このへんで誤解がないように、私自身のやってきたことも付け加えておかねばなりません。私は、港をつくったり、海を埋めたりと、最前線で潜水工事をしてきた張本人です。ですから、海の自然環境に直接手を加えてきた人間だともいえます。ですから、自分は正しいという立場から日本の海の現状を話すつもりはサラサラありません。むしろ、日本中の海の自然環境を

何らかの形で破壊してきたことの見直しと懺悔の思いも込めて、現状を自分のためにも見たものです。

あるとき、私は北海道の日本海側にある増毛という漁港で、一人の漁師さんと言葉を交わしたことがありました。その方は古くから漁をしている高齢の漁師さんでした。私も縁があつて、増毛の海の調査をずっと続けていて、十年近くになつていました。

その日の調査が一段落して、港で次の準備をしていたところ、その漁師さんが漁を終えて港に帰ってきました。船揚場があつて、漁師さんが舟を揚げたのでしたが、その方は年をとつていたので、その作業が大変そうにみえました。それで、そばに行つて舟を支えたりして斜路に引き上げるのを手伝いました。

すると、その漁師さんが「あんた方、何やってるのさ」と北海道弁で聞いてきました。「海藻を増やすのにどうやってたらいいか、調査をやってるんです」「ふーん」といって、「増毛もだめになったもんね。いや、だめになったべ」。昔は、増毛は（魚介類がとれて）すごかつたんですよ」といって、「うん、昔は山のように魚がとれた。でも港が立派になればなるほど、魚とれなくなるんだ」と、その漁師さんがBいみじくも、そういつたのです。

港が立派になればなるほど、何か知らんけど魚とれなくなるんだよな、と洩らしたわけです。現役の年のいつている漁師さんの口から、はつきりとその言葉が聞かれました。

そして、②防波堤をつくつたので、潮の流れが変わつて魚もすみづらくなつて、どんどん魚がとれなくなつてきた、といつて笑っていました。

潮の流れというのは、私たちが想像する以上に、海の生き物に大きく影響するようです。人工物をつくつて、ある場所の潮の流れがほんのちよつと変わっただけでも、海にとってはそれがかなり大きなダメージになっていくと思われまます。

港ができて生活が便利になった半面、どんな魚がとれなくなってきたという、漁師さんの言葉は、確かに的を射ていると思います。以前、やはり北海道のある漁業組合の方と磯焼け（Ⅱ海藻が消失して海の中が砂漠のようになること）の話をして、いたとき、古来の漁師さんがいました。「昔は昆布もたくさん生えていたし、ウニもたくさんとれた。大学の先生なんかは、いまはウニが増えたから昆布がとれなくなつた、というけれど、おれらの小さいころはウニもどつさりいたけど、昆布もたくさん生えてた。これをどうやって説明するんだ」といつていました。

さらに、「確かに水温が上がつたせいもあるかもしれないけれど、山から海藻や生き物に必要な栄養分が海に行かなくなつたのだろう。だつて海岸線に道路ができて、海岸線はコンクリートで固められているのだから、山からの養分も出ていかないんだらう」と、このように漁師さんなりの感覚の話が出ていました。

それから、「昔はタコでもニシンでも、とつてきたら、みんな浜でさばいて、さばいたカスや洗ったカスはみんな海に流していたんだ。あれはきつと栄養になつていたのではないか」というわけです。

さらに、「それをいまはあれをやつちやだめ、これはやつちやだめで、海にそんなことをしたらすぐ罰せられてしまう。そ

れを全部処理しなければいけない。それも化学薬品を使って処理しなければいけない」と話してくれました。

実は私も、そのことは海に潜りながら敏感に感じていました。私自身もプロの潜水士として、港づくりや防波堤づくりは専門であり、さんざんそれらをつくってきた側ですから、痛いほど漁師さんのいうことがわかるのです。でも、港をつくってほしいというのは、漁師さんたちからの要望でもあったわけですから。

日本はこれまで、土地開発として干潟や湾岸を埋め立てたり、魚をとって豊かになるために漁港をつくったり、交通の便をよくしようと思つて島や半島の先まで道路をつくったりしてきたのですが、あとになってみると、それが結局は、魚がとれない、海藻が生えないという結果を招いてしまったのではないかと思います。

ただ、ありがたいのは、漁師さん側にも、③そういうことをいつてくれる人が出てきたことです。私もあちこちの海をいろいろ見て歩くと、「これはまずかった。この港をつくったから、この海域が悪くなつて海藻が生えなくなったのではないか。魚がとれなくなつたのではないか」ということを感じるわけです。

それ以来、ずっと胸を痛めてきましたが、いみじくも漁師さんの側からもそういう発言が出だしているのが、いまの日本の海だと思います。

日本の国を豊かにしようと思つて、工業化を進めてきた結果、④自然の海がなくなってきたということです。自然の海というのは何の役にも立っていないように、よく見ていると役に立っているのです。砂浜一つひとつにしても、また干潟一つにしても、じつと観察すれば非常に役に立っているのです。水の浄化（じようか）になっていたり、生き物たちの産卵場（さんらんば）や育成場（いくせいば）になっていたりすることが見えてきます。日本の海は、日本が島国だけに、工業化に伴う海の埋め立ての占める割合が大きかったのが特徴（ちゆう）だったように思います。

（渋谷正信『海のいのちを守る——プロ潜水士の夢——』）

（注1） まず本文には書かれていないが、筆者はこの文章の後に「国外の海」について述べている。

（注2） 懺悔（ざんげ）過去の自分のあやまちなどを他者に告白すること。

（注3） 斜路（しゃろ）舟（ふね）を海から引き揚げたりおろしたりするためにつくられた斜面。スロープ。

問一 傍線部A「大仰な」B「いみじくも」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | |
|----------|------------|
| A 「大仰な」 | B 「いみじくも」 |
| ア 重大な | ア 意外にも |
| イ おおげさな | イ おどろいたことに |
| ウ おおざっぱな | ウ はつきりと |
| エ 不正確な | エ 不思議なことに |
| オ わざとらしい | オ まことにうまく |

問二 傍線部①「埋め立てが進みました。」とありますが、昔はなぜこれほどまでに「埋め立て」をおし進めたのでしょうか。

問三 傍線部②「防波堤をつくったので、潮の流れが変わつて」とありますが、これ以外に漁師さんがあげている、海産物がとれなくなった原因を二つ答えなさい。

問四 傍線部③「そういうこと」とはどういうことですか。二十字以内で答えなさい。（字数には句読点等もふくみます。）

問五 傍線部④「自然の海がなくなってきた」とありますが、筆者の考える「自然の海」とはどのようなものですか。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

小学四年生の章太は、島で生まれ育った少年である。腕のよい漁師だった「トクじい」からもぐりを教わったため、もぐりの腕なら誰にも負けない。学校から帰ると、毎日のように海にもぐつて遊んでいる。

章太がその女の子をはじめて見たのは、県道からひさしくんの家の夏みかん畑に行く、ほそい道のとちゅうだった。見たことのない子だなと思ひながら通りすぎようとしたら、泣くような声で、

「へび……が……いる……の」

といった。

見ると二メートルほど先に、大きなヤマカガシがねそべっていた。

章太はヤマカガシのしっぽをつかまえると、それを、頭の上でぶんぶんふりまわして遠くへなげとばした。

その子はおびえたようにそれを見ていた。

章太がゆきかけたら、その子は、

「ありが……とう……」

といった。

やっぱり声がふるえていた。

章太はちよつとしんばいになった。なんにも知らない子らしい。

章太は二、三步近づいて、その子に声をかけた。

「あのへび、ヤマカガシっていうんだけど知ってる？」

ううんと、その子は首をふった。

色のすごく白い子だった。

「アオダイショウってへび、知ってる？」

やっぱりその子は首をふった。

その子の目は、いちばんいいときの海のようにすぎとおつて、ふかい色をしていた。

すこし、まぶしくなつて章太は声がかすれた。

「ママシって……へび……知ってる？」

その子はじつと章太の目を見て、首だけふった。

「ママシは氣をつけたほうがいいよ。どくへびだから。だけど、ママシを知らなかったらしようがないなあ……」

章太はこまった。

「つちのこつて知ってる？」

やつと、その子はこつくり首をおった。

つちのこは、じつさいにいない動物だけれど、まぼろしの怪物といわれて、よく少年雑誌にその絵がのっている。

「つちのこみたいになんぐりしているへびだから、じきわかるよ。頭も三角だから……」

その子は泣きだしそうな顔になった。

「このへんに……いるの？」

「うん。ときどき……」

章太は親切でいったつもりだったが、よぶんなことをいったような氣がした。それで、

「めったに出てこないから……」

といいわけがましくいった。

その子はおびえきつてしまった。もう、半分泣きだしそうだった。

章太のせなかにかくれるように、よりそつてきた。

どうしようと章太は思った。

ちよつと勇氣を出して章太はいった。

「どこへいくの？ ぼく、いっしょについていってあげてもいいよ」

その子は、ごめんなさいといった。

それで、①章太は先に立つて歩きだした。

歩きながらその子に、

「へび、きらい？」

つてきいてしまった。まぬけだなあと章太は思った。

（そんなことあたりまえじゃないか。どうかしているぞ）

章太はあわてて、

「どこへいくの？」

と、また、きいた。

その子は、前と同じようにごめんなさいといった。

よく、ごめんなさいっていう子だなと章太は思った。しかし、それはとても感じがよかった。

「坂井さんのお家の夏みかん畑のすみに、古いお家があるでしょ。そこ」

その子の声はすこし明るくなっていた。

「お化け屋敷？」

ときいて、章太はまた、しまったと思った。

坂井さんというのは、ひさしくんの家の名前で、その子のいう古い家はずっと前から空き家だったのだ。

ひさしくんのおじさん一家がすんでいたところだが、都会に出てしまつてからずっとだれもすんでいない。

あれはててお化けが出そうなところだから、章太たちは、きもだめしをするのにつかったことがあるのだ。

章太がお化け屋敷？ とたずねたので、その子はへんな顔をした。

こわそうな顔じゃなくて、へんな顔をしたので、章太はすこしほっとした。

「あそこ、空き家だけど……」

その子はちよつとわらった。

「そこ、わたしのお家になったの。もうすんでる」

その子はそういった。

章太はびっくりして、その子の顔をまじまじと見た。

その子はちよつと首をかしげて、どうしたの、というふうに、章太を見かえした。

章太はどうしてか、むねがどきどきした。

「ほんと？」

とたずねた。ちよつと声がかすれた。

「ほんと」

と、その子はいった。とてもすなおな感じだった。

その子の家にきてみると、(章太にとってはお化け屋敷なのだが) 家の中らかなづちの音がした。

「ただいま」

その子が家の中にむかつてそういったら、

「おう」

と声がして、あごにいつぱいひげをはやした人が、やねうらのまどから顔をつき出した。ひげに(注)かんなくすがついていてた。

章太を見て、

「やあ」

といった。目がとてもやさしい人だった。章太はちよつと頭をさげた。

「あのね、おとうさん……」

その子がそういいかけた。

章太はどうしてか、その子がそのひげの人に、自分のことをきつと話すだろうと思った。

章太はあわてて、

「さようならア」

といつて(注)きびすをかえした。そして、かけた。

なにかとてもおいしい気もちだった、そんな気もちをふりきるように全速力でかけた。

すこしもほんとうのように思えないのに、ちゃんとほんとうになっていくことってあるんだなあと思つたのは、つぎの日、その女の子とふたたび会つたときだ。

しかし、そのとき、おまけがついた。

おまけというのは、ふだんの章太らしくないことをしているところを、その子に見られてしまったというありがたくないおまけだった。

日ごろ、章太はみんなにまじつてわるふざけをするというようなことは、ほとんどない。

ほんとうにその日は運がわるかつたというよりしかたなかつた。

「どうさんどうさん、おはなが長いのね」というあそびをやっていたのだ。

からの牛乳びんを口におしあてて、うんといきをすいこむと、牛乳びんは口にくつついておちなくなる。

まわりのものが、

「どうさんどうさん、おはなが長いのね……」

という童謡(どうよう)をうたうと、それにあわせて、口にくつついた牛乳びんをぶらぶらふらふらというわけだ。

くるしくなつて、いきをすいこむ力がなくなると、牛乳びんがおっこちて、その子の負けというあそびだった。

すこしでも長く、牛乳びんをくつつけておこうとして、みんな四苦八苦する。そのときの顔がすごくおもしろいのだつた。

そのあそびは、章太がだんぜん強かつた。あたりまえだ。毎日海にもぐっているから、ほかの子にくらべてばつぐんに、肺活量がある。

そのときの章太は、十三人も勝ちぬいていた。

「どうさんどうさん、おはなが長いのね。そうよ、どうさんは……」

みんなむちゅうだった。

先生が教室にはいつてきたことに気がつかなかつた。

「これこれ。みんな、何をしているの？」

担任の小宮山先生(こみやま)の声で、おおかたの子はあわてて机の前にすわつた。

むちゅうになつて、声えんをおくつていた何人かと、どうさんになつて、きそいあつていた章太と進一(しんいち)には、先生の声がきこえなかつた。

むせきにんなものだ。今までみんな楽しんでいたのに、いすにすわつたものは、とりのこされた章太たちを見て、くすく

すわらっている。

「これ。章太くん。進一くん」

小宮山先生の大きな声で、びつくりしてふりむくと、あの子が、先生とならんで立っていたのだった。その子は章太に気がついていたのか、章太の顔を見てすこしわらっていた。

章太はすぐにはずかしかった。

あわてていすにすわったのだが、その章太の顔を見て、みんな、どつとわらった。

十三人勝ちぬいてきたということは、ずいぶん長い時間、牛乳びんを口にくっつけていたことになる。

章太の口のまわりには、牛乳びんの口の形が、くつきりについていたというわけだ。

小宮山先生までわらいこらげている。

章太はどんな顔をしていいのかわからない。

やつとわらいをおさめた小宮山先生は、

「章太くんでもそんなことをすることがあるの？」

と、②章太の名譽をいくらかでもかいふくするようなことをいつてくれたが、章太はそのとき、もう死んでしまいたいくらいの気もちだった。

教室のざわめきがおさまってから、小宮山先生はいった。

「新しいお友だちをしようかいます。まちむら・かよさんです。こういう字を書きます」

そういつて小宮山先生は黒板に、「町村佳与」と大きく書いた。

「町村さんはずっと都会にいて、いなかのくらしはまったく知らないそうです。環境がきゆうにかわるとだれでも心ぼそいものでしょう。とくべつになかよくしてあげてくださいね」

小宮山先生はそういつた。

章太は、今にも泣きだしそうな声で、へびがいるの、といったその子を思いうかべた。

章太はその日、みんなよりひとあし早く学校を出て、いつもとはちがう道を通って家へ帰った。

その子に会うとこまるという気もちだった。そんなことまでしたのに――。

夕飯のすこし前、かあちゃんが章太をよんだ。

「町村さんのお家に、これをもつていつてあげなさい」

そういつて、赤飯のはいつた重箱を章太にわたそうとした。

章太がびつくりしてとまどっているとき、

「あんた、町村さんのお家を知ってるのでしょ。きょう、町村さんのおとうさんとおかあさんがひっこしのごあいさつにこら

れて、あんたのこと話しておられたワ。町村さんのお嬢さんといっしょのクラスになったんでしょ」

と、かあちゃんはいった。

かあちゃんが章太に重箱をおしつけようとしたので、章太は、

「いややで。ぼく、いかへん」

といっただ。

「どうしたの。この子。へんな子ねえ」

と、かあちゃんはいうし、

「章ぼうらしくないねえ」

と、章太のばあちゃんもいつた。

けつきよくは、章太はとうちゃんにげんこつを一つもらつて、しぶしぶその子の家へおつかいにいつた。

(③ついてないなあ。ぼく不幸や)

章太は口の中でぶつぶついいながら歩いた。

その子の家について、大きな声で、

「ごめんください」

といっただのに、だれも出てこなかった。しかたがないので、章太は明かりのもれているえんがわの方にまわった。

ガラスごしに中のようなすを見て、章太はびつくりした。

その子と、見おぼえのあるひげの人が手をうしろにくんで、口につけた牛乳びんをぶらぶらさせながら、「ぞうさんぞうさん」のあそびをやっていたのだった。

そばで、その子のかあさんらしい人がわらっていた。

章太がもう一ど、

「ごめんください」

といっただら、その子はこつちを見て、かわいい悲鳴をあげ、それから、あわててひげの人のうしろにかくれた。

「いややわあ。はずかしいわあ」

と、その子がいつた。

「かあさんから」

章太はぶつきらぼうにいつて、もつてきた重箱をえんがわにおいた。

「まあまあ……」

と、その子のかあさんらしい人が立ってきたが、章太は、

「さよなら」

と喋ってかけた。

何か喋っているのをせなかにきいたが、章太はとちゅうで、ぐんとスピードをあげた。④章太の心がすつとかるくなった。

(注1) かんなくず＝木をかん^{けず}で削^{けず}って出た^{けず}。

(灰谷健次郎『海になみだはいらない』)

(注2) きびすをかえす＝引き返す。あともどりをする。

問一 傍線部①「章太は先に立って歩き出した。」とありますが、なぜ章太はこのような行動したのですか。

問二 傍線部②「章太の名誉をいくらかでもかいふくするようなことを喋ってくれた」とありますが、なぜ小宮山先生の発言が名誉を回復するのですか。

問三 傍線部③「ついてないなあ。」とありますが、「ついてない」とはどういうことを指して言っていますか。

問四 傍線部④「章太の心がすつとかるくなった。」とありますが、それはなぜですか。

【三】 次のカタカナの部分^カを漢字に直しなさい。

1	夜空のセイザ。	2	ウチュウのかなた。	3	県の新し ^チ ヨウシヤ。
4	高いバイリツの試験。	5	ピアノのドクソウ。	6	ヨクアサまで待つ。
7	夕暮れのジョウケイ。	8	広大なコクソウ地帯。	9	産業カクメイの歴史。
10	肉をレイゾウする。	11	魚のホネ。	12	教えにシタガウ。
13	キビしい指導。	14	勇気をフルウ。	15	税金をオサめる。

【三】

11	6	1
12	7	2
う		
13	8	3
し い		
14	9	4
う		
15	10	5
め る		

問四

.....

問三

.....

問

【二】
問
一

--

問四

[illegible]

問三

2	1

問一

【一】
問
一

A
B

二〇一五年度
国語解答用紙

受験番号

--	--

氏名

--	--

評 点

--	--